

# 社会が変わるには

——自由の社会進化論によせて——

熊本大学 多田光宏

## 1 本報告の目的

本報告は、とくにニクラス・ルーマンの社会システム理論に依拠し、個人的自由と社会秩序の関係を論じたい。知られるように、ユルゲン・ハーバマスはそのシステム理論を、「社会がどう変わるかを説明するだけで、社会がどう変わるべきかは説明しない」と批判した。今の社会システムをどうすべきかについて何の規範も提供せず、支配秩序の安定に寄与する社会テクノロジーであり、社会変革への市民的实践を否定していると。なるほどマルクスも述べたように、社会をあれこれ解釈するよりも変えることが大事な場合はあろう。ただ、複雑な社会の完全な計画化が不可能なのはほかならぬマルクス主義の実践から明らかであるし、そもそも社会がいかんして変わるのかは理論的に見ておく意義がある。そのことをとくに個人的自由との関連で考えるのが報告の趣旨である。

## 2 規範的秩序から自生的秩序へ

上の目的のためにまず、理念に関するエミール・デュルケムの議論を見てみたい。彼は、理念をいま現にある社会的事実であり、社会学の主題だとした。彼は、産業化と社会分業に伴う多様な個性化により、道徳的個人主義——スペンサー流の適者生存の利己主義的個人主義とは異なる——が市民宗教化すると考えた。それが多様性と統一性の、言い換えれば個人的自由と社会秩序の両立を可能にする。啓蒙の子である彼にとって、人間崇拜へのそうした理念の進化は社会構造の変化に伴うべき必然であった。ただデュルケムは、まずはフランス国民社会の枠組で、その望ましい統合（連帯）を企図していた。よって、個人的自由と社会秩序のより原理論的な論者として、アンリ・ベルクソンならびにアルフレート・シュッツも見てみたい。ベルクソンは、自由が、固定化され社会化された理念ではなく、各個人の動的な内的持続にあると考えた。彼は、決定論と非決定論の対立を仮象問題とし、時間を空間的に再構成する近代科学の合理主義を批判して、意識に直接与えられている純粹持続への回帰を主張した。さらに、スペンサー流の進化論は空間的再構成にすぎず、アクチュアルな生成過程としての創造的進化を把握するよう論じた。他方、シュッツは純粹持続の基底性を認めつつも、その経路依存性（何かを自明と見なす自然的態度のエポケー）からは反省によって脱し、自ら設定した未来の目標に向けて合理的に行為するという近代的な個人像を維持した。ただし反省審級は特権的なものではなく、それもまた内的時間のなかで多様な経験秩序の一部となる。シュッツにとってこうした自己準拠的構造こそが意識の内的秩序の本質であり、また、スペンサーを批判してパーソンズが想定したような共通価値にもとづく規範的秩序ではなく、より基礎的な自生的秩序の主題化の契機でもあった。すなわち、個人の行為からは何らかの秩序がつねにおのずと立ち上がる。無秩序とは、たんに期待される望ましい秩序の不在を意味するにすぎないのだと。

## 3 偶然性と社会進化

以上を踏まえてルーマンの社会システム理論に立ち入りたい。シュッツ同様、ルーマンはシステムを自律的と捉え、その基礎に時間的・経路依存的な自己準拠性を看取したが、理論化の作業自体

は社会的水準で徹底した。社会はまずは自生的秩序であり、規範や理念は現在時点での社会的選択にすぎず、交換可能である。こうした構想は、各個人（各意識システム）が原理的に自律的だと捉えるかぎりでも可能であり、そのためルーマンは、他者は根本的にブラックボックスであり、一致や合意を導く共通基盤は与えられていないと考えた。だがこのことが社会の進化の基礎だというのがルーマンの見立てでもあった。個人は、社会の変革主体というよりもノイズであり、その自律性ゆえに社会にゆらぎを起こしうる。むしろルーマンは、個人の選択があらかじめ社会構造に条件づけられているという現実を認識していた。だが個人が自律的なら、その体験や行為は社会に完全には統制されえない。もとより意図せざる偶然的な帰結も伴いうる。ルーマンは、スペンサー流の適者生存（利己主義的個人主義）の社会進化論とは異なり、別の可能性は選択（淘汰）によっては根絶されず、意味地平で保存されつづけると考えた。一度否定された選択肢は永遠に閉ざされるとはかぎらず、また低確率な可能性でも絶対にありえないわけではない。

ルーマンは、体験と行為の別の可能性の増大が社会進化だと定式化した。ただ、高度に複雑ではあるが個人から見れば体験と行為に別様性が認められていない、という全体主義的社会はありうるし、それが望ましいものとして選択される可能性もある。ファシズムが近代において発生したことを考えれば、近代社会の分化形式（機能分化）自体は必ずしもそれを防がない。道徳的個人主義への理念進化によるコスモポリタンな連帯は約束されていない。ただその種の秩序体制は、個人の体験・行為にゆらぎの幅を与えないため、環境変化や再帰的リスクなどで袋小路に陥った際に別の選択肢を採れない。逆に、複雑性を偶然性に転換できる社会は代替案を生み出し、さらなる進化を手にする確率が高い。個人の体験・行為の別の可能性が、社会が変わる基礎である。よって規範や理念、あるいは競合する施策や政策も、別様性の増大への寄与という社会進化論的観点から比較評価されるべきだろう。リベラリズムやソーシャリズムやコンサバティヴィズムといった名称自体はどうでもよい。近代固有の価値として準拠すべきは偶然性である。この包括的な価値観（価値自由という価値）は、近代においてはもはや事実的にも理念的にも交換不可能なのである。

#### 4 結びにかえて——社会学的啓蒙再訪

最後に、社会進化への社会学の寄与にも簡単に触れておきたい。理性啓蒙は、一意的な正解に辿り着けるとする「致命的な思い上がり」のもと、望ましいとする特定秩序への変化を進歩の名で追い求める。だが社会が複雑である以上、完全な計画化は不可能である。これに対し社会学は、経路依存的に自明視されたリアリティ（たとえばライフスタイルに関するそれ）の選択性と別の可能性とを示すことで、ゆらぎを与え、自生的秩序として社会自身が変わるチャンスと共鳴（また社会と個人の共進化）を増幅させる。絶対の正解や万能薬の不在を出発点とするこの社会学的啓蒙は、非理性的な相対主義やポストモダニズムではない。誰もが社会を銘々に望む理想の姿へと変えたがっている時代において、理性の限界（盲点）を観察しつづける動的で再帰的な「ロマの理性」（ルーマン）である。正しい答えへと教え導くのではなく、正しいとされているのとは別の見方を示す。それは、自分の全能性を思い上がって上から指図する新たな規範理論ではない。また、自分の主義信条に照らして望ましくない秩序の支持者たちを無知蒙昧な連中と非難排除するエリートの教条主義でもない。上／下や右／左に関係なくさまざまな認識者に現れている選択的リアリティを「理解（観察の観察）」し、そのうえで、別様のあり方や意図せざる帰結を示していく。「自然的態度のエポケー」のエポケーを促して、社会の進化に寄与するのである。